

# 支援組織体制モデル「大学eラーニングマネジメント（UeLM）モデル」 が社会人学習者に与える効果

## An effect of the "University e-Learning Management (UeLM) Model" for Supporting Instructional Activities of e-Learning at Higher Education Institutions on Adult Learners

宮原俊之<sup>\*1, \*2</sup>  
Toshiyuki MIYAHARA<sup>\*1, \*2</sup>

<sup>\*1</sup> 明治大学

<sup>\*1</sup>Meiji University

鈴木克明<sup>\*2</sup>

Katsuaki SUZUKI<sup>\*2</sup>

<sup>\*2</sup> 熊本大学大学院

<sup>\*2</sup>Graduate School, Kumamoto University

あらまし：高等教育機関において、組織的な支援体制を構築することで、eラーニングを活用した授業においても、学生が対面授業と同等の学習効果を得ることは可能である。その支援組織体制の一つが、大学eラーニングマネジメントモデルである。本論文では、この大学eラーニングマネジメントモデルを社会人を対象とした講座に適用したときの効果について、学生に対して実施した結果との比較をとおして考察し、学生と同様に対面授業と同等の学習効果をあげることができることを明らかにする。

キーワード：eラーニング、教育支援、高等教育、組織設計

### 1. はじめに

高等教育は、「教育（活動）の多様化」に対応するために「教育改善（見直し）」を行うことが求められており、その実現のためには教育活動を構造化し役割分担を確実に行う必要がある。eラーニングを活用した教育活動を効果的に実施することは、有効な手段の一つであり、「大学eラーニングマネジメントモデル（以下、「UeLMモデル」とする）」（図1）が支援組織体制として効果をあげている<sup>(1)</sup>。本論文では、このUeLMモデルを、社会人を対象としたeラーニングの講座に適用し、その効果について学生に対して実施した結果と比較することをおして検証し、UeLMモデルが社会人学習者に対しても有用であることを明らかにする。なお、社会人と学生という学習者の違いに着目しているため、ここでは、講座の運用時のみを取り上げる。

この有用性の確認は、社会人を主たるターゲットにす

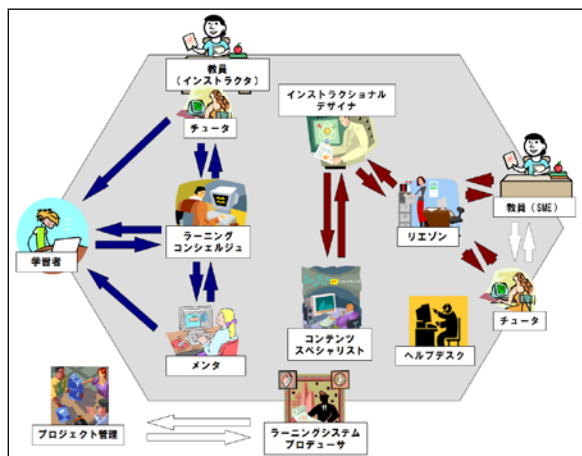


図1 UeLMモデル

る大学や大学院の場合のみならず、高等教育機関を超えたeラーニングを活用した教育活動でのUeLMモデル活用への足がかりともなる。

### 2 実証実験

#### 2.1 評価方法と対象

評価は、UeLMモデルの評価を行った時と同じく、R.Mガニエらによる教育システム評価<sup>(2)</sup>の手法を用いた。

評価情報としては、明治大学で実施しているメディア授業<sup>(3)</sup>（eラーニング授業）の学部生を対象にした「司書・司書教諭課程」と社会人を対象とした「司書講習」の受講者に対して実施した学生アンケート結果と、各々の単位取得率および成績分布とした。これは、両方の科目構成がほぼ同じであり、また、同じeラーニングコンテンツを活用しているためである。

アンケートの質問項目は、究極の質問<sup>(4)</sup>（「この科目の受講を自分の信頼する人（友人等）に勧めますか？」を10点満点で問うもの）とその採点理由のみを必須とし、考察・評価の際は、授業評価の3ポイント<sup>(5)</sup>：(1)授業方法（授業そのもの）、(2)学生が何を学んだか（学びたいことが学べたか）、(3)学生がその科目を好きになってくれたか（学問への興味）——の質問項目に対する回答にも十分留意した。必須項目を少なくすることでの回答率アップを図り、かつ、授業評価に必要な要素についての影響を捉えるための工夫である。

なお、「職能」自体の位置づけに違いはないが、社会人については、学習者の自己制御能力を加味し、「メンタ」の役割から「定期的な声掛け」を除外した。

## 2.2 結果と評価

図2に究極の質問の結果を示す。ここで示しているNPS値とは「Net Promoter Score」というもので、推奨値(10, 9点)の割合から批判者(6点以下)の割合を引いたものである。社会人は、学生と比べてNPS値も高く満足度が高い。加えて、7割以上が「学びたいことが学べた」と回答し、半数以上が「この科目を好きになった」と応えている。単位取得率や成績についても、学生同様に対面授業と同等の効果を出している(表1, 2)。サポートについては、「声掛け」を失くした分、学習支援は「特に学習に影響はない」という回答が多いと考えていたが、それに反して学生とほぼ同じ3割以上が、「この学習支援体制の影響があった」と答えている。これらの結果から、社会人に対してもUeLMモデルが有用であることは示され、これは学習支援に必要な「機能」を変化させてもUeLMモデルが有用であることも示唆している。

また、究極の質問の批判者の理由としては、授業の内

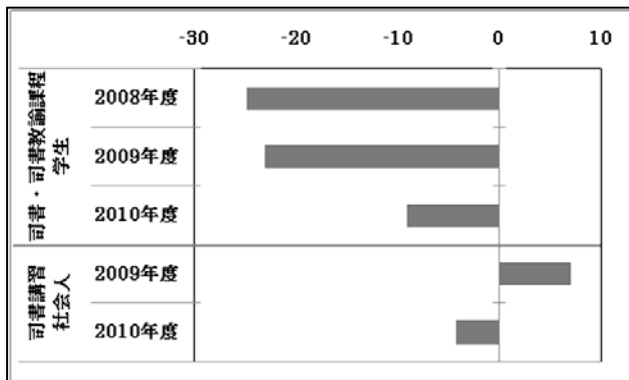


図2 NPS

表1 受講者人数と単位取得率

| 期間         | メディア授業開設科目数 | 受講学生数<br>(同一科目・のべ) |      | 単位取得率<br>(同一科目) |       |
|------------|-------------|--------------------|------|-----------------|-------|
|            |             | メディア授業             | 対面授業 | メディア授業          | 対面授業  |
| 2008年度(※1) | 12          | 173                | 912  | 83.2%           | 85.5% |
| 2009年度(※1) | 12          | 225                | 929  | 82.7%           | 85.9% |
| 2010年度(※1) | 12          | 207                | 995  | 90.3%           | 86.8% |
| 2009年度(※2) | 13          | 495                | 935  | 86.2%           | 95.1% |
| 2010年度(※2) | 13          | 915                | 900  | 87.0%           | 97.8% |

※1: 司書・司書教諭課程, 学生

※2: 司書講習, 社会人

表2 成績分布 (S, A評価のみ, 同一科目)

| 期間                    | 成績 | メディア授業 | 対面授業  |
|-----------------------|----|--------|-------|
| 2008年度<br>(司書・司書教諭課程) | S  | 36.1%  | 16.0% |
|                       | A  | 33.3%  | 30.8% |
| 2009年度<br>(司書・司書教諭課程) | S  | 49.4%  | 14.4% |
|                       | A  | 25.3%  | 46.5% |
| 2010年度<br>(司書・司書教諭課程) | S  | 36.2%  | 19.9% |
|                       | A  | 30.0%  | 26.1% |
| 2009年度<br>(司書講習, 社会人) | S  | 47.1%  | 34.0% |
|                       | A  | 28.1%  | 50.4% |
| 2010年度<br>(司書講習, 社会人) | S  | 31.9%  | 40.7% |
|                       | A  | 25.7%  | 40.0% |

容や効率性についての指摘が多かったことに加えて、「専門性が高い」「やりたければ自分でさがすべき」と意見が目立ち、「このようなことは人に勧められてすべきことでない」という意見も複数みられた。2010年度の学生意見として多かった「自分でコントロールするのが難しい」という意見はなく、社会人に「自己制御力」があることを示す結果となった。

## 3 まとめと今後の課題

今回の社会人学習者に対する実証実験の結果から、改めてUeLMモデルを活用したeラーニング授業は、少なくとも対面授業と同等の学習効果をあげることが分かった。

また、学習者の立場の変化にあわせて「機能」についても、何らかの変化をさせることは十分検討する余地があることも分かった。そして、UeLMモデルの生命線は、「機能」をいかに有効に機能させるかであるから、学習者の立場に立ったマネジメントの必要性についても示唆されたことになる。

今後は、今回の評価情報に加えて、「機能」間での情報流通状況や、教員、支援スタッフのアンケート結果もあわせて検証しさらに効果を確認した上で、学習者の立場を分析しその能力に応じて「機能」の分化を含めたUeLMモデルを変化させた(派生させた)モデルケースを構築する。これは、様々な学習者の立場における効果的なeラーニング学習環境を実現する手助けになる。

ただし、その効果の持続性については、とても速いサイクルで新しい教育の方法が現れる現代において永遠の確認ではないため、定期的なチェックが必要である。支援組織体制の柔軟性を高め、豊富なバリエーションを視野に入れた質保証のためマネジメント強化策を継続していくことは、重要な要素となる。

## 参考文献

- (1) 宮原俊之, 鈴木克明, 阪井和男, 大森不二雄: “高等教育機関におけるeラーニングを活用した教育活動を支える組織支援体制「大学eラーニングマネジメント(UeLM)モデル」の提案”, 教育システム情報学会誌, 27(No. 2), pp. 187-198 (2010)
- (2) R. Mガニエ, W. Wウェイジャー, K. C. ゴラス・J. M. ケラー著, 鈴木克明・岩崎信監訳: “インストラクショナルデザインの原理”, 北大路書房(2007)
- (3) 明治大学ユビキタスカレッジホームページ: “<http://www.meiji.ac.jp/ubiq/>” (2008)
- (4) フレッド・ライクヘルド, 堀新太郎監訳: “顧客ロイヤルティを知る「究極の質問」”, ランダムハウス講談社(2006)
- (5) Robert Reiser: “Effective Teaching: How to Plan and Present It: One Professor's Opinions”, リーサー教授大阪講演(2007)